

【ポスター発表】

地域階層別にみたソーシャルキャピタル尺度得点の差異

— 高齢者を対象とした縦断的・横断的検証 —

- ○ 東京都健康長寿医療センター研究所 氏名 深谷 太郎 (会員番号 4668)
 小林 江里香 (東京都健康長寿医療センター研究所・3755)
 野中 久美子 (東京都健康長寿医療センター研究所・7394)

キーワード3つ：ソーシャルキャピタル、高齢者、地域

1. 研究目的

近年、近所付き合いなどのつながりが注目されている。そのような地域のつながりについて、社会学や経済学、公衆衛生学などでは、俗に「ご近所の底力」などといわれる、ソーシャルキャピタル（以下 SC）という概念が用いられる。この SC については、住民に質問して測定する尺度も存在するが、その場合、調査さえ行えば丁目レベルの SC、町の SC、市区町村 SC、都道府県の SC、国の SC と、範囲を無限に広げることができる。しかし、広い範囲で測定された SC について、その SC 得点は比較的均一なのか、狭い範囲の有意差を捨象してしまっているのかは不明である。また、SC 得点はどの程度安定しているのかも不明である。

そこで、本研究では(1)丁目レベル、町レベル、エリアレベルの3つのレベルの SC を想定し、その間の差異を探ること、(2)上記の SC が2年の間にどの程度変化するのか、の2つを探ることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

1) 分析対象：調査対象地域は首都圏近郊の X 市である。X 市は人口 10 万人弱、65 歳以上人口割合が約 15%、昼夜間人口比率は約 85%という、典型的なベッドタウンである。X 市には 10 の町に合計 24 の丁目が存在しており、これを互いに接する 3 つのエリアに分割して扱う事が多い。2008 年 7 月に首都圏近郊の X 市に住民票のあり、かつ要介護 4 および 5 を除く 65 歳以上市民の 1/3 にあたる 2528 名に対して郵送（一部訪問）調査を行った。その対象者に対して、2 年後の 2010 年に同様の手法で調査を行った。本研究では、当該データセットのうち、下記の分析項目に欠測のなかったデータを利用した。

(注)当該自治体の特定を防ぐ為、(1)市の特性は本研究に直接の影響がないので、概数で記載した。(2)町

および丁目の数については、回答者数が5未満の丁目は除いて記載した。

2) 分析項目：SC 項目は、一般的な信頼として「あなたは、世間一般の人は信頼できると思いますか、それとも、常に用心した方がよいと思いますか」、近隣への信頼として「あなたの近隣に住む人々は信頼できると思いますか、それとも、常に用心した方がよいと思いますか」、そして、「私の住んでいる地区はとても安全である」「私の近所の誰かが助けを必要としたときに、近所の人たちは手をさしのべることをいとわない」「私の近所には誰かが

家を留守にしたときに、その家のことを気軽に世話してくれる雰囲気がある」「急病の時など、すぐにかかれる医療機関があって安心できる地域である」「私の地域では、お互いに気軽に挨拶を交し合う」「将来も今すんでいる地域に住み続けたい」という6項目の尺度およびその合計点を用いた。一般的な信頼、および近隣への信頼については「信頼できると思う」を1、「常に用心した方が良い」を7として1～7の点数を尋ねた。6項目の尺度は「そう思う」「どちらかというと思う」「どちらともいえない」「どちらかというと思わない」「そう思わない」の5択で尋ねた。

3. 倫理的配慮

調査を行う前に、発表者の所属する研究機関において倫理委員会の承認がされ、質問において倫理上問題のある項目がないことが確認されている。また、回収された調査票および電子化されたデータには、対象者氏名、対象者の生日は記載されておらず、調査対象者の個人情報漏れる可能性はない。

4. 研究結果

本研究で用いたデータの対象者数は右表の通りである。

一元は一分散分析を用い、各レベル毎に横断的に平均値の有意差を検討したところ、多くの場合、丁目単位で有意差がある場合、町レベルでもエリアレベルでも有意差が認められるが、(1)同じ町内でありながら、丁目が異なると有意差がある(2)丁目では有意差はないが、町単位では有意差がある(3)町単位では有意差があるが、エリアでは有意差がない、等のケースが多数存在し、範囲を広げることで有意か否かは一概に言えなかった。

次に、縦断的に変化を検討したところ、「近所の人たちは手をさしのべる」以外の全ての項目で2時点間に有意な差異がみられ、2時点間で回答に変化が無かったのは、項目によって違いがあるが対象者中の40～60%であった。

エリア	町	丁目	n(%)
1	1	1	17(0.7%)
		2	41(1.7%)
	2	3	364(15.0%)
	3	4	302(12.5%)
	4	5	8(0.3%)
		6	29(1.2%)
		7	5(0.2%)
2	5	8	196(8.1%)
		9	155(6.4%)
		10	47(1.9%)
		11	9(0.4%)
	6	12	17(0.7%)
		13	44(1.8%)
		14	74(3.1%)
		15	68(2.8%)
		16	34(1.4%)
		17	4(0.2%)
	7	18	195(8.0%)
		19	159(6.6%)
		20	293(12.1%)
21		199(8.2%)	
3	8	22	54(2.2%)
		23	10(0.4%)
	9	24	100(4.1%)
		合計	2424(100.0%)

表1 エリア・町・丁目コード対照表

5. 考察

全く有意差が見られなかった「私の住んでいる地区はとても安全である」以外はいずれかのレベルで有意差が認められたが、それは一貫した傾向は見られなかった。よって、量的な分析を行う場合、どのレベルの変数を用いるかの選定が重要である可能性が示唆される。また、2年間という短い期間で有りながら、回答の揺らぎは大きく、調査時期が異なると地域変数が変化することも示され、異時点の変数の利用が難しい可能性も示唆された。